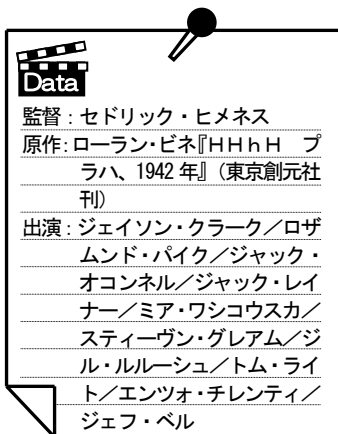




👁️👁️ みどころ

原題の『THE MAN WITH THE IRON HEART』とは誰？邦題の『ナチス第三の男』とは誰？それは、「ユダヤ人問題の最終的解決計画」を立案し実行した男、ラインハルト・ハイドリヒだ。その暗殺計画が『エンスラポイド作戦』で、その実行は1941年5月27日だが、その結末は？

本作後半は基本的に『ハイドリヒを撃て！「ナチの野獣」暗殺作戦』（16年）と同じで、“二番煎じ”的だが、それでも迫力満点で涙を誘う物語になっている。そして、前半が原題、邦題どおり、ハイドリヒに焦点を当てた物語だが、さて“一粒で二度おいしい”？それとも“どっちつかず”？さらに、ロザムンド・パイク演じる妻リナ存在感バッチリだが、それも一粒で二度おいしい？それとも・・・？

私的には、中国共産党の習近平総書記と対比するためにも、もっとナチ党内の権力闘争の描写に力を注いでほしいと思ったが、さて・・・。

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * ——

■□■原題も邦題も、焦点はハイドリヒその人！■□■

近時「チャーチル」に焦点をあてた映画が続けて2作も公開されたが、本作の原題の『THE MAN WITH THE IRON HEART』とは誰のこと？また、邦題の『ナチス第三の男』とは誰のこと？それは、ラインハルト・ハイドリヒだ。金髪、碧眼、長身という典型的な“北欧人種”の容姿を持った彼が、原題のように“鉄の心を持った男”と呼ばれたのは一体なぜ？

そしてまた、何よりも“ユダヤ人の最終的処理計画”の提案者で推進者であったハイド

リヒが、ナチス宣伝相のヨーゼフ・ゲッベルスや国家元帥のヘルマン・ゲーリング等を抜いてヒトラー、ヒムラーに次ぐ「ナチス第三の男」と呼ばれたのは一体なぜ？

本作を観ればきっと、彼がなぜ「鉄の心を持った男」と呼ばれ、また「ナチス第三の男」と呼ばれたのかわかるはずだ。

■原作は『HHhH プラハ、1942年』。その焦点は？■

フランス人のセドリック・ヒメネス監督が本作を企画したのは、ドイツ人作家ローラン・ビネの小説『HHhH プラハ、1942年』に魅せられたためらしい。もちろん私はこれを読んでいないが、タイトルからすれば、これはきっと1939年3月以降、ドイツの保護領とされていたチェコスロバキアの首都プラハで1942年5月27日に起きた「エンスラポイド作戦（ハイドリヒ暗殺作戦）」に焦点を当てて書かれた小説。

この「エンスラポイド作戦」は、直近では『ハイドリヒを撃て！「ナチの野獣」暗殺作戦』（16年）で描かれた有名な暗殺事件だ（『シネマ 40』190頁）。そこでは、イギリスに亡命していたチェコスロバキアの軍人がパラシュートでチェコ領内に潜入し、レジスタンスの協力を得てハイドリヒ暗殺計画を断行する姿が描かれていた。ハイドリヒ暗殺は唯一ナチス高官の暗殺に成功したケースで、それ自体は大成成功だったが、その報復はすさまじいものだったから、その帳尻は？

原作はそのタイトルからしても、きっとそのハイドリヒ暗殺をリアルに描いているはずだ。しかし、本作の原題と邦題が前記のようにされていると、その両者のバランスは・・・？

■この手の映画では女性は刺身のツマだが、本作は？■

歴史上の人物（男）や事件に焦点をあてた映画では、女優は“刺身のツマ”になる傾向が強い。しかし、『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』（17年）（『シネマ 41』26頁）と『チャーチル ノルマンディーの決断』（17年）（『シネマ 42』115頁）という2つの“チャーチルもの”では、チャーチルの人間性やその演説に焦点をあてていたものの、チャーチルの妻クレメンタインの存在感も相当なものだったから、近時の女性の地位の向上を感じさせてくれるものだった。

しかして、本作のハイドリヒ役にその容姿が如何にもアーリア人種的な（？）俳優ジェイソン・クラークを起用したのはベストな選択だが、本作ではその妻リナ・ハイドリヒ役に『ゴーン・ガール』（14年）（『シネマ 35』159頁）でアカデミー賞主演女優賞にノミネートされた女優ロザムンド・パイクが起用されていることに注目！そうすると、本作では女優はきっと刺身のツマ的役割ではないはずだ。さらに本作では、もう1人私の大好きな女優ミア・ワシコウスカも起用されている。彼女が一体どんな役かはしっかり確認してもらいたい、ミア・ワシコウスカも出演するとすれば、これも刺身のツマ的役割ではなさそう。

さあ、原題『THE MAN WITH THE IRON HEART』、邦題『ナチス第三の男』の本作で、この2人の女優は如何なる役割を？

■□■ “一粒で2度おいしい”？それとも“どっちつかず”？■□■

本作はちょうど120分だから平均的な時間だが、きっちり前半をハイドリヒの人間性に、後半をハイドリヒ暗殺計画の実行に焦点をあてて描いている。そのため、本作は、“一粒で2度おいしい”といえる作品になっており、パンフレットにある高崎俊夫（編集者、映画批評家）のコラム「実験的手法の原作から生まれた、作家的野心を感じさせる秀作」では、次のように書かれている。

『ナチス第三の男』が、これまでの類似作品と大きく異なるのは、前半ではハイドリヒという冷酷極まりない大立者をクローズアップして、深く寄り添うように描き、後半では一転、狙撃者であるチェコ人のヤン・クビシュ（ジャック・オコンネル）とスロヴァキア人のヨゼフ・ガブチーク（ジャック・レイナー）という二人の青年に視点を移すというユニークな〈語り口〉を採っていることである。それは、一見、あたかも一本の映画の中に二つの異なる作品が混在しているような、不思議な印象を与えるのである。」

たしかにそうとも言えるが、それは逆に言えば、“どっちつかず”とも・・・？

本作導入部は、あるダンスパーティの席で、海軍士官学校を経てキールのバルト海海軍基地に通信将校として勤務していたハイドリヒ（ジェイソン・クラーク）が、貴族階級の娘リナ・フォン・オステン（ロザムンド・パイク）と出会い、彼女をダンスに誘うシーケンスから始まる。その後、みるみるうちに2人の親密度は深まっていくが、そこで面白いのは、ハイドリヒは真面目な（だけの？）海軍軍人であるのに対し、リナは確信的なナチ党（国家社会主義ドイツ労働者党）の支持者であることを明確に示し、思想的な一致があるか否かを結婚のポイントにしていること。これは、没落貴族であったため異常なほど立身出世欲の強いリナが、結婚する夫の力によってその夢を実現しようとしていたことを明確に物語るものだが、そんなリナの個性を本作でしっかり見せるため、セドリック・ヒメネス監督はリナ役にリナザムンド・パイクを起用したわけだ。

そのため、前半のハイドリヒの立身出世物語（？）の中にはリナの影響力が随所に見られることになる。しかし、このようにリナの役割を大きく描いたことによって、ハイドリヒ自身のナチ親衛隊内部での権力闘争の実態やユダヤ人の最終解決計画策定に向けてどんな研究を行っていたのか等々、ハイドリヒ本人についての掘り下げが弱くなってしまいうから、一長一短がある。つまり、ハイドリヒの人間性を描くについて、妻リナの個性や活躍にウェイトを置いたのは、一粒で2度おいしい？それとも、どっちつかず？

■□■ “女の失敗”で不名誉除隊！それで人生は終わり？■□■

近時は、功なり名を遂げてからの“不倫スキャンダル”で人生を棒に振ってしまう人も多いが、若い時の“女の失敗”は何歳くらいまでOKなの？ちなみに、2月1日から公開されるヒュー・ジャックマン主演の『フロントランナー』（18年）では、ジョン・F・ケネディの再来と言われ、1988年のアメリカ合衆国大統領選挙の最有力候補（フロントランナー）だったゲイリー・ハートは、たった1つの女性スキャンダル報道で政治生命を抹消されたい。

ヒトラーが絶賛したアーリア人種（ドイツ民族）はセックス面での能力も高いようで、純粋なアーリア人であるハイドリヒの若い頃の女性関係はかなり奔放だったらしい。そのため、本作導入部では、ある意味では愛情いっぱい、ある意味では計算高いハイドリヒとリナの恋愛から結婚に至る姿が描かれるが、その途中でハイドリヒの女性スキャンダルが露見。その女性の父親で海軍上層部にコネクションがある男からの訴えによってハイドリヒは軍法会議にかけられ、そこで「男なら誰もあんなクソ女と結婚しない」というハイドリヒの弁明にもかかわらず、ハイドリヒは不名誉除隊とされてしまったから、アレレ……。

これで俺の人生は終わり？ハイドリヒはそう思ったようだから、その後のハイドリヒの怒りのぶちまけ方は本作導入部のハイライト(?)になる。しかし、それをうまく御し、「今回の女性問題は許すが、今後一切それを口にするな」と誓約させて結婚に踏み切るリナとその両親は、ある意味で凄い。今はどん底だが、ハイドリヒには未来があると見込んだわけだが、さてその見立ては……？

■この入党が転機！党内の権力闘争をいかに？■

下手すると、あの“女の失敗”で終わってしまったかもしれないハイドリヒの人生の転機は、ナチス党への入党だ。ハイドリヒの力量は、ナチ党に入ってからまだ2ヶ月という段階でナチ党親衛隊（SS）の指導者ハインリヒ・ヒムラーと直接面会した場面で発揮されたい。つまり、新たな「情報部」創設の意向を持っていたヒムラーに対するハイドリヒの提言は実に正鵠を得たもので、一瞬にしてヒムラーをして「この男は切れ者」と確信させてしまったわけだ。その後の彼は、自分自身の出世欲に目覚めたうえ、共産主義者とユダヤ人の撲滅というナチ党から与えられた任務が自分の価値観とピッタリ一致したこともあって、ナチ党員として目覚ましい出世を続けることに。

もちろん、党内での出世競争と権力闘争に打ち勝つためには、あらゆる権謀術策が必要。そこで、彼が自ら運営する娼館「サロン・キティ」に盗聴器を仕掛け、セックススキャンダルをネタに上官たちを次々と恫喝し、屈服させていく姿は興味深い。SS保安部（SD）の責任者となり、ゲシュタポ（秘密国家警察）を手中に収めたうえ、警察機構とSDを国家保安本部（RSHA）に統合し、その責任者となったハイドリヒなら、相手がたとえ正規軍の司令官であろうと“弱み”さえ握れば負けるはずはないわけだ。ちなみに、中国共産党内部では近時、習近平主席の「ハエも虎も叩く」という言葉が流行し、現実には「政敵」だ

った薄熙来や周永興、徐才厚らを次々に血祭りにあげたが、レベルこそ違え、1930年代後半のナチ党内では、ハイドリヒによるその手の党内権力闘争が繰り広げられたわけだ。

私的にはそんな姿をもっと詳しく描いてほしかったが、前述の「どっちつかず」の扱いによって、その点は少し消化不良・・・？しかし、そんなハイドリヒの姿を見ていると、若い頃のちょっとした“女の失敗”なんて！

■後半も迫力満点で涙を誘うが、“二番煎じ” 感も・・・。■

原題でも邦題でも本作のタイトル通り、前半の主人公になったハイドリヒだが、1941年9月、37歳にして彼がヒトラーによって事実上チェコの「総督」に任じられた後の“ハイドリヒ特有”のチェコ統治のあり方は、本作ではほんのさわりしか描かれていない。それにかわって、前述したように、本作後半は基本的に『ハイドリヒを撃て！「ナチの野獣」暗殺作戦』と同じ物語が俳優陣を変えて展開していく。ハイドリヒの暗殺計画である「エンスラポイド作戦」がイギリスで立案されたのは1941年10月1日。ちなみに、英国特殊作戦執行部（Special Operations Executive、SOE）では、ハイドリヒは「ナチス第三の男」ではなく、「ドイツ占領下ヨーロッパにおいてヒトラーに次いで恐らく二番目に危険な人物」と書かれていたそう。

それはともかく、本作後半の、①ヨゼフ・ガブチーク（ジャック・レイナー）とヤン・クビシュ（ジャック・オコンネル）ら計7人の暗殺部隊をパラシュートによってチェコ領内に送り込むシークエンス、②レジスタンスたちの協力を得ながら暗殺計画を進めていくシークエンス、③そして、1941年5月27日の暗殺断行のシークエンスは、『ハイドリヒを撃て！「ナチの野獣」暗殺作戦』と同じだ。また、暗殺（未遂）後の教会内での立ちこもりは『ハイドリヒを撃て！「ナチの野獣」暗殺作戦』でも涙を誘った物語だが、歴史上の事実を勝手に動かすわけにはいかないため「エンスラポイド作戦」を描いた本作後半が『ハイドリヒを撃て！「ナチの野獣」暗殺作戦』の“二番煎じ”のようになるのは仕方がない。しかし、あまりに似通っているのは如何なもの・・・？

まあ、それでも「エンスラポイド作戦」そのものが衝撃的であるため、本作後半のスリルも相当なもので、涙を誘うものになっている。したがって、本作後半の鑑賞もしっかりと！

2019（平成31）年1月31日記